

# リエントリーショック

北村 豊

私は大学を休職し、青年海外協力隊員として半島マレーシアの熱帯降雨林の中の国立先住民病院で3年間活動した経験がある。出国時は、雪降りしきる羽田空港からだった。

だが、昭和55年春の帰国時には、新しく建設された成田空港に着陸した。その当時は成田エクスプレスも無く、都心に行くにはリムジンバスの使用を余儀なくされた。そのチケット売場で発した私の帰国第一声「何でそんなに高いんですか？」という驚きの表情と共に発した言葉を、42年も経過した今も鮮明に思い出す。

帰国後の私は、異文化の国から自国に戻った時に、慣れ親しんだはずの母国の文化に対して違和感を覚え、再度適応に伴い感じてしまう驚きや戸惑いがあったのである。カルチャーショックという用語は、日本人にも比較的知られており、私が帰国直後から感じた現象は、異文化ではなく母国の文化に触れて生じるリバース（逆）カルチャーショック、またはリエントリーショックとも呼ばれる。これらに共通な適応プロセスは、4段階に分類されることが多い。第1段階は、新しい文化の中で、気分

が高揚する「ハネムーン期」と呼ばれる。2段階目は、素晴らしく見えた異文化の中に欠点が見えて来る「ショック期（不適応期）」であり、狭義のカルチャーショックはこの時期に相当する。第3段階は、異文化に慣れてくる「回復期」と呼ばれる時期である。最後の4段階目は、違いを受け入れて柔軟に対応できる「適応期」である。これらのステージを参考に自分を振り返ってみると、マレーシア入国後は全く？カルチャーショックもなかったが、帰国直後に大きなショックを受け、寝言もマレー語か英語に

なっていた私は、そこからの脱出に約半年もかかったことを思い出す。母国はすでに3年前の母国ではなく、私が普通の人生でめったに経験しない森の民との3年間の貴重な経験をしたこととすでに3年前の自分とは大きく変化してしまっていたのが大きなショックを受けた主因だと考えている。

カルチャーショックはネガティブな要因と見られることも多いが、私の人生のたった数%の3年間を4〜6万年前にアフリカから渡来した先住民の子孫と生活を共にして学んだことは、私の人生をポジティブに大きく変えてくれたことだけは確かである。最近、SDGsの17色を配したバッジの付いたスーツを誇らしげに着た企業人や、政府関係者をマスメディアで見かけることが多くなった。彼らは持続可能性について本当に理解しているのだろうか？

バッジこそ付けてはいないが、数万年もの持続可能な生活を実践し続けてきた半島マレーシア先住民から学ぶべきことはとても多い。

（上高井郡小布施町 信州口腔外科インプラントセンター所長）